

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 下平 泰生
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.45 No.3
2021.6.1
(通巻 267 号)

日本新聞製作技術懇話会
会 報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

新会長に清水氏選出	3
virtual.drupa 報告	
全体像と上流部門	インテック (CONPT副会長) 林 克美 4
下流部門	西研グラフィックス 新聞営業部国内営業課マネージャー 向江 一人 6
美味あっちこっち	コダック 執行役員報道メディア営業統括部統括部長 久米 邦雄 7
新局長に就任して	神戸新聞社 情報技術局長 富本 一男 8
	山陽新聞社 印刷局長 綾野 雄紀 9
	中国新聞社 執行役員技術局長 高島 義之 10
楽事万歳	高知新聞総合印刷 新聞印刷本部副本部長 岡 勝彦 11
改善提案にみる“頑張る現場”	日経東京製作センター 取締役東雲工場長 加茂 信喜 12
CONPT日誌	14
わが職場あれこれ	東奥日報社 システム局専任局次長兼画像部専任部長 福士 敦 15
会員消息	15
会員名簿	16

- 表紙写真提供：CONPT-TOUR2016 から 事務局アーカイブ「ロンドン ハイド・パーク」
- 表紙製版：㈱デイリースポーツ
- 組版・印刷：㈱デイリースポーツ

新会長に清水氏選出

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は5月17日に開いた第47回定時総会で、会長に清水英則氏(清水製作代表取締役)を選出した。

CONPTでは、木船正彦会長が3月31日付で辞任。藤間修一副会長が会長代行を務めてきた。評議員会は4月度の会合で、会長選任のための推薦委員会を立ち上げ、会長に清水氏を推薦することで一致、今総会に諮った。

総会の信任を得た清水氏は、「会長として、会員社の皆様とともにCONPT活性化のため力を尽くしたい。厳しい環境下で新聞社の事業発展の礎を築きたい」と決意を語り、会員社の結束と協力を求めた。

清水氏は2012年2月からCONPT担当者となり、会計監事、企画委員会の副委員長を務め、19年5月から企画委員長。49歳。



日本新聞製作技術懇話会の第47回総会は、来賓として日本新聞協会から技術委員会の増田雅己委員長(読売新聞東京本社専務取締役)、事務局次長兼編集制作部長の神田俊英氏、編集制作部技術・通信担当主管の菊地彰氏を迎え、日本プレスセンタービルで開いた。会員社35社41名が出席した(オンライン参加含む)。



清水英則会長

日本新聞製作技術懇話会 第47回 定時総会

藤間修一副会長(会長代行)は開幕挨拶で今回の総会について、新会長選出や法人化に関する議題を挙げて「CONPTの新しい船出へのステップだ」として、重要性を強調した。

来賓挨拶で増田技術委員長は、新型コロナウイルス感染症による新聞界の苦境を乗り越えるため、「CONPTとの密接な意見交換、情報共有を進めたい」と語った。神田事務局次長は今秋計画している新聞製作講座について紹介するとともに、CONPTが計画するオンライン展示会への協力の意向を明らかにした。

今総会では、新会長選出のほか役員体制、2021年度の予算、事業計画などが承認された。

コロナによって、20年度の活動は自粛、中止の状況が続いた。21年度年度の事業計画では、オンライン展示会のほか、新聞社の技術対話、新工場見学、CONPT技術研究会などをコロナの状況をみながら実施していく。CONPT-TOURの再開については、国内外のコロナの状況、新聞社・会員社の意向などをもとに慎重に検討する。

CONPTの一般社団法人化については、会長辞任に伴い4月は見送られた設立登記申請を7月1日付で行うこと、新法人発足まで現在の役員体制を継続することが了承された。

オンライン展示会へ方針説明

第47回定時総会を終えた後、企画委員会が検討を進めるオンライン展示会について、阿部浩之企画副委員長が今後の方針を説明した。

阿部副委員長は、オンライン展示会という新しい情報提供の機会を作ることが「CONPTの存在意義」だと強調。先に企画委員会が行

った会員社アンケートをもとに、出展料への関心が高いこと、オンライン展示会に不慣れな企業があることなどを紹介し、「会員社の意見を参考に、費用や開催時期など詳細を詰め、新法人の事業計画として提案したい。出展社、来訪者となる新聞社双方にメリットとなる展示会を考える」と語った。

virtual.drupa報告

国際印刷・メディア産業展drupaの開催が、新型コロナウイルス感染症の拡大により、2024年5月まで先送りとなった。代わって「virtual.drupa」と名付けたオンライン展示会が4月に開かれた。その全般情報と展示内容について報告する。

全体像と上流部門

(株)インテック (CONPT 副会長)

林 克美

drupaは当初、ドイツ・デュッセルドルフで2020年6月に開催が予定されていたが、コロナ禍の状況を受け1年延期された後、結局リアル展示会の開催は見送りとなった。

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は、drupaには毎回、視察ツアーを派遣してきた。海外渡航がままならない現状で、今回のデジタルイベント開催は、良い機会を得たと言える。実機展示が見られないのは残念だが、これまで、CONPT-TOURの参加者に提供してきた会場視察マップに替えて、virtual.drupaの概要をまとめた。

■展示会サイトの構成・機能

展示会は4月20日から4日間開かれた。終了後、主催したメッセ・デュッセルドルフグループは「35か国212社が出展し、平均140名が参加した125以上のライブセッションが行われ、合計で約600,000 ページビュー、45,000 ユニークユーザーを獲得した」と発表した。

今回行われた基調講演のトレンドはArtificial Intelligence、Connected Consumer、Platform Economy、Circular Economyの4つで、5つに分けた特別フォーラム(touchpoint packaging、drupa cube、touchpoint textile、3D fab + print、dna - drupa next age)では、他の産業分野向けの

ケーススタディや革新的なアイデアを示したという。

実際の展示形態をみると、リアル展示と同様のカンファレンスと製品展示に加えて、会場内でビジネスパートナーを探すようなビジネスマッチングの機能が提供されていた。また、カンファレンスなど動画コンテンツは時間帯を決めてプログラム配信し、世界中で同時に視聴可能とした。

製品は、各社の製品情報を製品カテゴリ、出展社、ニュースリリースなどの項目で検索することができる。製品情報は1ページの出展社ページに掲出されているが、動画など情報コンテンツよりも上に担当者の名刺情報が配置されて、コンタクト先を明確にしている。

担当者の名刺表示はマッチング機能と共に、オンライン開催の一般的な課題である「人に出会う(=ビジネスチャンス獲得)機会の喪失」を補う機能として用意されたのであろう。

なお、チャット機能は10月末まで利用でき、動画コンテンツはVideo Libraryとして整理され、出展社の製品情報と共に2021年12月末まで閲覧ができる。

■出展概要

サイト検索で表示される出展社数は211社、出展製品数は1738件で日本企業の出展は8社であった。

カテゴリは大中小の3段階に分類され、それぞれに対する出展社数、製品数が検索結果として表示される。中分類における出展社数、製品数を次頁表に示す。

■主要ソフトウェアのカテゴリ

今回のdrupaにおいて主要なソフトウェアは、大分類のプリプレスまたはプリメディア・マルチメディアに登録される。両カテゴリに登録された製品は、EFI社のEFIブランド製

virtual.drupa の出展社数と出展製品数

カテゴリ	出展社数	日本企業数	出展製品数
全体	211	8	1738
prepress / print	107	5	585
Publishing software	6		19
Workflow and data handling software	38	3	131
Software	14	1	45
Software for packaging prepress	13		44
Equipment & systems for printing forme production	23	1	90
Sheet-fed offset printing machines	7	1	23
Web-fed offset printing machines	10	1	43
Flexographic printing machines	19		61
Letterpress machines	1		10
Gravure printing machines	12	1	25
Hybrid printing machines (combination of methods)	12		19
Digital printing machines and digital printing systems	45	5	196
Screen printing machines	4	1	2
Pad / Tampon printing machines	2		1
Printing machines and systems for special printing applications	39	2	103
Encoding and Identification systems	6		11
premedia / multichannel	24	1	66
Software for multimedia	6		4
Services and equipment	5		13
Online Service	16	1	39
E-Business Print	11	1	32
Mulichannel-Publishing	6	1	15
post press / converting / packaging	82	3	554
Bookbinding machines and print finishing machines	68	3	350
converting	46	1	214
finishing	18		45
future technologies	60	1	171
Printed electronics	19	1	24
Applications for organic and printed electronics	7	1	1
Applications for nanotechnology	2		0
Industry 4.0	36		128
3D-print	7		18
Inspection and test systems	5		16
Research and development	6		4
materials	60	5	338
Paper, cardboard, board	7		36
Paper, cardboard and board for packaging	5		18
Paper, cardboard and board for technical and special applications	3		3
Films / foils	14	1	89
Other substrates	3		6
Ink, varnish, toner	19	4	76
Chemicals and other additives	9	1	9
Printing unit interior	18	1	86
Adhesives and glues	4		14
Bookbinding materials	4		7
Embossing and laminating materials	4		44
Conveyor belts and tapes	3		6
equipment / services / infrastructure	103	1	430
Peripheral equipment	53		263
Measuring and testing engineering	28		75
Knives & grinding machines	1		4
Light sources and Colour matching systems	3		2
Input devices	1		0
Output devices	7	1	21
Industrial associations and professional organizations	12		25
Basic and further training	14		15
Press and Media	2		0
Print services providers	4		9
Used machinery dealers	5		7
Certification, testing and standardization	2		6
Machine transportation and machine mounting	3		3
Consultancy services	10		22
Research and development	17		20
Infrastructure	12		24

品、Dataline社のMultiPress Highlight、コダック社のPRINERGY On Demand Business Solutions、priint group/Werk II社のpriintであった。

Dataline社のMultiPressは、オフセットとデジタル印刷のワークフロー制御を実現する製品として、デジタル印刷への移行手段を提案している。priintはAdobe社のInDesignの自動組版機能など出版・編集系のソフトウェアで、日本法人も存在している。

■Future Technologies

Industry 4.0に関連する製品、3Dプリント関連に加えて、印刷品質検査のカテゴリがあるが、製品数8のうち6件がEyeC社の製品。展示期間後にサイト内のEyeC社にTop Exhibitor、Premium Exhibitorのタグが付された。タグの意味するところはわからないが、注目を浴びる要素として、印刷品質検査があるのだろう。

*オンライン展示会を考える

今回のvirtual.drupaは、『来場者にとって

の情報収集の機会』、『出展社にとってのビジネス機会』というイベントとして充分であったと思う。

オンライン展示会の利点である「居ながらにして目的とする技術情報を自らのペースで調べる」ことができた。ただ、現地に行かなければ得られない情報があることも実感した。

例えば、主要なソフトウェアとして紹介したのは、汎用的に利用可能な製品に留まった。実際は機器メーカーが自社機器を制御するソフトウェアも多く存在しているはずだが、検索にヒットしなかった。現地視察ならば、機器メーカーのブースを訪れた際に簡単に確認できたことが、オンラインでは難しいと感じた。

また、検索では自分の知識の延長にある情報にしか到達できないが、複数の識者が情報交換を行いながら視察するCONPT-TOURであつたら、自らの視野も広がるし、より多くのことを報告できるだろうと思う。次期drupaは2024年開催という。ツアーで現地を訪れることができることを願う。

下流部門

西研グラフィックス(株)

新聞営業部国内営業課マネージャー

向江 一人

■展示の概要

virtual.drupaには、さまざまな印刷関連機械、後工程、資材などが展示されていた。CONPTの会員関連では、富士フイルム社、コダック社、BALDWIN社、コニカミノルタ社、マンローランドゴス社、ミュラー・マルティニ社などが出展していた。

展示の多くは商印関係の内容で、パッケージ、グラビア、書籍などの印刷機だ。方式は、オフセット枚葉印刷、オフセット輪転印刷、

グラビア印刷、インクジェット印刷、フレキソ印刷、スクリーン印刷など様々な用途の印刷機がある。残念ながら、新聞印刷分野の展示はほとんどなかった。

商印の印刷技術は、様々なアイデアがあり進化している。特にインクジェット、3D印刷、環境印刷などに各社が力を入れている感じだ。後工程の機械も数多く展示されていて、様々な用途の機械がある。新聞と違い多種多様な印刷物があるため、後工程の技術には感心するものが多々あった。

■トレンド

ドイツが国家レベルで推奨している産業革命がIndustry 4.0である。Industry 4.0は、

IoT（モノとインターネット）に加え、そのモノとモノの繋がりがポイント。モノの繋がりの情報で最適化された生産体制を維持しつつ、自律的、自動的に稼働させる。最終的にめざすところはスマートファクトリーになる。

生産設備のあらゆる情報を集積、分析(AIなどを活用)し、設備の稼働状況、資材の発注、メンテナンス情報発信など、かかわるモノの情報が繋がっていく。いわゆる、遠隔地で腕を組んで座っているだけで、独自に製品が生産されていくことだ。

各メーカーは装置の目(Input)、頭脳(AI)、手足(Output)を切磋琢磨して開発している。今後、スマートファクトリーを実現させるには、メーカーの技術革新はもちろん、ユーザーが工場(モノづくり)において様々なモノの

情報を統治し、仕組みを構築することが重要なことだと感じた。

*オンライン展示会を考える

今回の報告は、英語が得意でない私にとってはかなりのプレッシャーだった。しかし、ネット翻訳技術は進化していて、WEBページを開くと勝手に翻訳してくれる。動画の発展も多く、なんとなくイメージは感じられる。

ただ、一方的な情報発信であって、深層を探るには、コミュニケーションという面で難しいと感じた。でも、これがオンライン展示会だと思う。入口で面白いコンテンツによって興味をもたせ、コンタクトをとれるようにすることが目的ではないだろうか。今後、オンラインでの催し物を行う際の参考にしたい。

とんかつ竹亭（鹿児島）

今回のご紹介はトンカツです。鹿児島で人気のお店だそうで、値段と味のバランスが優れているトンカツとして、私の中でも全国で上位を保っています。流行りのゼロキロカロリーに逆行する食事ですので、食後は多少なりとも罪悪感が出ます。

最近周りの関係者から、仕事より食事に精力を費やし過ぎているのでは、とのご指摘がありますが、私のスタンスは、「仕事も食事も大切に、どちらが欠けても人生は楽しくない」となっております。また、全国各地の料理には地域の歴史と文化が集約されていると考えています。

前置きが長くなりましたが、本題の竹亭のとんかつは、やわらかく厚みのある豚肉はもちろんのこと、油やパン粉、そしてお米や味噌汁、漬け物、山盛りのキャベツに至るまで、素材にこだわっています。味噌汁は白味噌で、少し甘めではありますが、

美味あつちこつち



こころ和む定食

豆腐と菜がはいったシンプルな仕上げで、こころが和む味です。

お腹が空いている時は、掟破りのとんかつ二枚乗せの「ダブルかつ定食」を注文します。ボリューム満点で食後の仕事を忘れそうになるほどの満足感を味わえます。鹿児島市内のほか県内に何店かあるようですので、出張の折にはご探訪ください。

今後も引き続き、仕事と食事と家庭のバランスを取りつつ、各地の料理を楽しんでいきます。

コダック
久米邦雄

新局長に就任して

職場の風通し常に良く

神戸新聞社 情報技術局長

富本 一男



コンピューターによる新聞製作が本番を迎える1988年(昭和63年)に入社した。上流工程のシステム部門に配属。何度も映画を見に来ていたシネマフロアが改装されてサーバー室になっていた。今のサーバーとは違い、コンビニの飲物用冷蔵庫くらいの大きな機械がたくさん並んでいた。入社後しばらくは、直径約30センチの磁気テープ(MT)がぐるぐる回るMT装置をメインコンピューターだと思っていた。MTをエムティーとは読まずに、エムテと読むのは「テープのテーヤ」と教わった。選挙のテスト電文は紙テープ保存だし、親指シフトキーボードのワープロがあった。

1995年(平成7年)、阪神淡路大震災。京都新聞社はじめ、たくさんの新聞社や取引先に支えられた。懇話会の会員社のみなさんにもお世話になった。本社は倒壊しなかったが全壊で、使える状態ではなかった。災害対策システムなど存在しなかった。震災当日から印刷工場でシステムの再構築にとりかかった。震災の4日後、再構築に必須のデータやソフト回収のため、傷ついた本社に入った。サーバー室横の崩れた壁から入る光がまぶしかった。外では絶え間なく消防車のサイレンが鳴っていた。それが最初の仕事場への最後の入室だった。

1999年、デジタルの技術部門に異動。携帯電話の課金サービスが始まった頃だった。どんなサービスが収益を生むのかわからない。まずはアイデアを商品にすることが大事だっ

た。自社ホームページと携帯サービスの他、社外からの持ち込み企画やニュースの提供依頼も多かった。短期間で、少ない経費で、利用者の前に商品を並べることを優先した。見込みのあるサービスは少しずつ機能拡張したが、たくさんのサービスが実験で終わった。仕事を通して大勢の人と交流し、新聞社以外では「若手」とは20歳台の人のみを指すと知った。

2017年情報技術局。入社した局に戻ってきた。知った顔が半分いたので安心したがCTSは変化していた。記事集配信は素材管理システムに、遠隔地送信は統合出力システムになっていた。ネットワークやセキュリティーの知識も必須になっていた。再勉強が必要だった。合わせて局員と順番に飲みに行った。プチ贅沢ランチだった人もいる。仕事の話はほとんどしなかった。一年近くかかったけど、ちょっとだけ心の距離を縮められたと思う。

*

2月25日付で情報技術局長。局は現在、編成部とシステム部、管理部などの体制。局長になるにあたって、編成部とシステム部の間に席を移してもらった。近所でみんなの仕事の様子を見ているだけで、自分も仕事をした気になる。稀に口を挟む。まったく仕事をしていないみたいだが、素直にみんなの話を聞き、職場の風通しを常に良くしておくことを心掛けたい。局員みんなが得意分野とアイデアを持っている。新聞製作だけ、デジタルだけ、と自分たちで勝手に仕事の範囲を決めている余裕はない。自分も含め、全体の利益を考えて提案と行動ができる、そんな技術系社員が集まる組織になろうと思う。

それから、今まで上司や同僚に叱ってもらってばかりだったから、これからは他人を叱れる大人になろうと思う。もうひとつ、いずれまた順番に、色んな人と軽く寄り道したいです。

「新しい新聞社」の一翼担う

山陽新聞社 印刷局長

綾野 雄紀

「これはすごい」。2月28日の印刷局長就任を前に、岡山県早島町と倉敷市にある2工場を訪れ、朝刊の刷り出しから刷了、発送までの工程を見守りました。少しでも早く、印刷現場を知りたかったからです。



高速で次々と送り出される新聞。最新鋭の技術が詰め込まれた輪転機に、大げさかもしれませんが、機能美とともに、ある種の“崇高さ”を感じました。それは新聞印刷の歴史の積み重ねの結果であり、現在の到達点でもあるからでしょうか。

＊

1983年(昭和58年)の入社後、編集、メディア部門で大半を過ごしました。印刷工場を担当職場の目線でとらえるのは初めてです。ここで「商品としての新聞」が最終形となります。輪転機という巨大な装置を操作する従業員の動きが頼もしく感じられました。

ネット社会の進展、人口減少、無購読者の増加、災害対応など新聞業界を取り巻く環境が厳しいのはいうまでもありませんが、新たに新型コロナウイルスが猛威を振るい、厳しさの度合いは加速度的に増しています。

改めて実感したのは、こうした逆境にあっても、いや逆境だからこそなおさら、より早く、シャープで鮮やかな紙面を読者に届ける印刷部門の普遍的な使命です。新型コロナウイルス感染拡大でどれほど正しい情報が求められているか、そして新聞こそが、その担い手であるとの思いを一層強くしました。

今年度からスタートした中期経営計画(2021～23年度)は、新聞メディアとデジタルメディアを融合させるハイブリッド戦略を打

ち出しています。DX(デジタルトランスフォーメーション)への取り組みを強化し、仕事のあり方を根本的に見直して、地域になくてはならない、持続可能な「新しい新聞社」の創造をめざしています。

印刷部門でも、将来を見据えて変革に挑戦していきます。中でも工場の効率的な運用は大きな課題です。適正な人員配置による安定操業、生産性の向上とコストダウン、労災事故防止と生産設備の保守管理などにこれまで以上に力を入れます。新規の印刷受託の開拓も図っていきます。

多発する自然災害やコロナ感染に備え、危機管理のレベルを上げ、BCP(事業継続計画)対策をブラッシュアップする必要があります。想定外のことが起きても被害を最小限に抑え、新聞発行を継続しなくてはなりません。山陽新聞は創刊143年となる2022年夏、紙齢5万号の節目を迎えます。

＊

ところで、私は印刷局長と編集局製作管理センター長を兼務しています。同管理センターは新聞製作システムを担当するシステム部と、印刷・輸送の計画と監視をする工程管理部の2部で構成しています。6月1日付で組織改革を行い、印刷局と同管理センターを統合し、「制作技術局」が創設されます。皆さんがこのCONPTを手にするころには、伝統ある印刷局の名称がなくなり、次のステージに入っていることでしょう。

今回の新聞製作の下流部門の統合は、印刷から発送までの一連の工程を円滑化し、より機動的な組織とすることが狙いです。DXへの対応や職能開発、人材育成を進め、常に発展し続ける新局でありたいと願っております。

コロナ禍が終息し、各社の皆さまとリアルにお目にかかれる機会を心待ちにしつつ、「新しい新聞社」づくりの一翼を担えるよう日々精進したいと思います。

一緒に考え、しなやかに

中国新聞社 執行役員 技術局長

高島 義之

2021年2月から技術局長に就任しました。1985年(昭和60年)に中国新聞社に入社した当時、新聞制作が活字からCTSに変わる時期でした。上流の活版部門に配属され、その後、画像処理、システム、印刷や輸送も含めた新聞制作全体の管理を経験しました。2019年2月からデジタル部門に異動し、2年間、電子版の立ち上げ、アプリ開発などを経験して技術部門に戻りました。

*

技術局は2020年に制作管理センターから名称を変更して、守備範囲を広げました。

制作管理センターは、新聞制作のシステム管理、編集支援、印刷から輸送までと、上流から下流までの新聞制作を担当していましたが、技術局になり、社内の全システム管理をするようウイングが広がりました。

新型コロナ感染拡大防止のためリモートワークを推進、新聞制作の要である整理部の作業場所を印刷工場や別フロアの会議室に分散させました。東日本大震災の後に策定した事業継続計画を応用しました。万への備えの大切さを改めて感じました。

*

デジタル部門に異動した最初のミッションは、デジタルは紙購読者の付加サービスとしていた位置づけを見直し、紙と並ぶ収入をめざしての再スタートでした。これにあわせて中国新聞IDを新設。ID取得者にはニュースメールを配信して、中国新聞デジタルへの来訪を促します。中国新聞デジタルのメニューは、新聞購読よりお安いプランなど、複数の料金体系を設けました。マーケティングツ

ルを導入して、ID取得者の行動履歴分析して施策を打てるようにしました。

このプロジェクトでは、スタートアップ企業と連携しアジャイル型で開発を進めるケースがほとんどでした。何をめざすか大きな方向性を定め、詳細な詰めをせずスタートします。ユーザー、ベンダーの垣根なく一緒にアイデアを出し合いながら、実施と検証を繰り返し、成果を短時間で得るようにします。他社が持つ新技術やサービスと連携して、より大きな効果を得ることもありました。

スタートアップ企業の皆さんは、新型コロナ感染が広まる中、何事もないように在宅テレワークに移行、新たなテクノロジー活用と同じように「しなやか」に対応しました。このスタンスはぜひ取り入れたいものです。

私が在籍した2010年頃までの技術部門は、ウオーターフォール型が主流でした。技術リサーチをして、複数の実施案を作成。その中から最適な計画を立案して実施する形です。これに比べ圧倒的なスピード感は魅力です。

一方で最終ゴールを見通してスタートしていかないで、結果が目標に届かない、開発費が増大する、開発が遅延する——などリスクがあります。我々は効果と技術の妥当性を見極める「目利き」、プロジェクト全体を見通してコントロール力が必要になりました。

*

中国新聞社では2020年11月から統合編集システム検討プロジェクトが発足しました。紙と、さまざまなデジタル媒体に向けて情報発信できるシステムを2024年頃に稼働させるように検討しています。各媒体に最適なコンテンツ、ワークフロー、データ管理など課題は山積しています。先進社の事例を学ばせて頂き実現をめざしたいと思います。

印刷、輸送の生産体制をどう整えるかも大きな課題です。デジタル技術の活用で効果を得られないか、メーカー、現場の皆さんと一緒に考えてゆきたいと思っています。

歳万事楽

郷 亡

高知新聞総合印刷
新聞印刷本部副本部長

岡 勝彦

高校を卒業するまで、四万十川河口の小さな港町で育った。昭和30年頃までは、京阪神向けの材木と炭の積み出し港として、大層な賑わいだったと聞く。山から切り出した材木で筏を組み、その上に炭を満載にした。その筏で四万十川を下り、河口まで運んでいたという。四万十川にダムが整備されなかったのは、陸路の整備が遅れ、水運が昭和の半ばまで利用されていたからだとも言われている。

当時、河口の町では、筏の船頭たちが泊まる宿が軒を連ねていた。材木と炭を売って得た大金を懐に入れた男たちが威勢よく飲み歩き、いざこざも絶えなかったという。今では信じられないが、映画館が2件、当時では大変珍しいミラーボールを備えた結婚式場もあった。郵便局の開局も四国で2番目だったと地区の古老に聞いた。

*

昭和も最早遠くなり、河口の小さな町は見える影もない。卒業した中学校も生徒の減少が止まらず、複式学級になるとの噂もあったが、遂には統合の上での休校。事実上の廃校となることに決まった。たまに帰郷すると、昼間の町のあまりの静かさに愕然とする。誰一人歩いていないのだ。それもそのはず、地元には働く場所がないので、市内の中心部へと働きに行く人がほとんど。昼間に残っているのは、お年寄りばかりなのだ。

そんな寂れた港町でも、南海地震に備えて高台への避難路が出来上がった。山道を拡幅し、滑り止め付きの舗装もきちんとされている。夜間の避難にも備えて、太陽光を利用した蓄電式の照明まである立派なものだ。だが、

避難路を確かめようと登ってみるお年寄りは誰一人いない。お年寄りには、急坂過ぎるのだ。精一杯緩やかにしようとする配慮は見えるものの、いかんせん地形が急峻。土地も狭隘で限界があるのだ。この町のお年寄りは口々に、「若い人だけで逃げて。年寄りは、ちょうど良い頃合いだと思って、置いていけ。探しに来るなよ」と言う。私の母親もそんな一人だ。誰も、お年寄りを抱えてあの坂は上がれまい。地元の消防団も、万一の時は小さな子供の避難が最優先。後は、自分の足で上れるものだけ。そう決めているようだ。どうしようもない。とにかく人手がないのだ。理解は出来る。理解は出来るが、やり切れない。

*



昔と同じ景色だが…

帰郷のおり、その避難路を夜の散歩がてら歩いてみた。満月の夜だったが、照明は十分明るく闇夜でも大丈夫そうだった。山の上の中学校の「最短通学路」だった山道が、きれいに拡幅されている。学生の頃は、よく遅刻しそうになり、全力で駆け上がっていたものだ。今となっては、少し登っただけでも息がはずむ。5分も歩くと開けた場所に出た。ここが指定の避難場所のようだ。眼下に町が見える。灯りの点いている家は少ない。寂しさに言葉を失う。夜風に乗って、潮の香りが届いた。満月の明かりが海を照らす。泳いで行けることが、一人前の男の証だった沖合の磯も遠くに見える。夜空は果てしなく遠い。あの頃と景色は何も変わりがなかった。時代の役目を終えた町から、人だけが静かに消える。やがて、その時がくれば跡形さえも残らない。そう思い、見上げる夜空は、果てしなく続いている。

改善提案にみる“頑張る現場”

〈2〉

日経東京製作センター

取締役東雲工場長 加茂 信喜

日経東京製作センターは、東雲、川崎の2工場を抱え、首都圏の中心地域に新聞を届けている。2005年3月に日経の製作現業部門と当時、大崎にあった千代田総業が合流するかたちで発足し、今年で16年目となる。

2006年9月から日々の業務改善推進運動を展開し、各部からの多くの提案により一定の成果を上げてきた。2008年4月に日経自社系工場の48頁24面カラー化工事が無事完了し、6月に経営の重点課題として①技術力向上②高品質の新聞製作——の2点をめざして「技術委員会」が発足。この年から新たな制度と

して業務改善表彰制度がスタートした。

表彰は、年1回行われる。毎年10月に各部の選抜者で構成される技術委員会メンバーによる「改善表彰審査部会」の募集呼びかけにより、各部から業務改善表彰申請書が提出され、12月の審査部会を経て、受賞者には翌1月の社員総会で賞状と社内報奨金が贈られる。部やグループなどの組織、個人から毎年10件ほどの応募があり、社員のやる気を促し、組織を活性化させ、生産性の向上につながっている。社長賞、A賞、B賞、C賞、努力賞、特別賞と、原則すべての改善提案を表彰している。

今回は、ここ数年で表彰されたいくつかの改善提案について紹介する。

1.FT減斤紙導入トラブル調査およびPLCソフト変更による改善 (東雲工場)

【改善前】FT（フィナンシャル・タイムズ）の巻取紙を減斤紙に変更して以降、傾斜式紙庫への入庫時にトラブルが発生するようになった。巻取紙は紙種とサイズごとに紙庫で保管される仕組みになっているが、C巻がD巻と認識されてD巻レーンに入庫される。減斤紙によるバーコード情報に変更はなかった。

【改善策】粘り強く調査した結果、巻取り重量の変化が原因であることがわかった。日本の製紙会社はバーコードには巻取サイズ情報があるが、海外製はそれがなく、重量情報でサイズ分けをしていた。減斤紙で重量が軽くなったため、サイズ認識が正しくできなくなっていた。

対応を入庫・紙庫設備メーカーに頼めば有償となるため、自社で巻取り重量を調査し、PLCのプログラム変更を行った。

設定した巻取り重量範囲

	従来	変更後
A巻	800kg以上	700kg以上
C巻	600～799kg	500～699kg
D巻	599kg以下	499kg以下

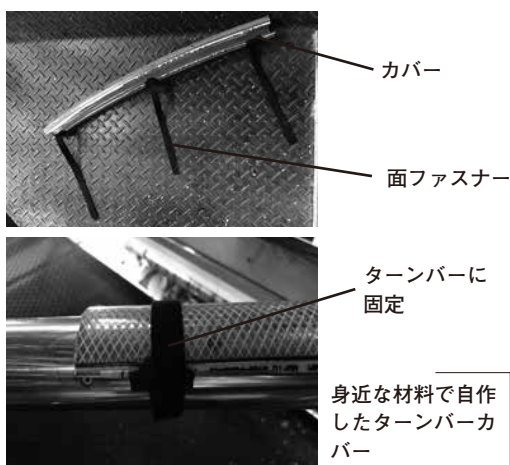
【効果】資材の変更が予期せぬトラブルにつながったが、PLCソフト変更以降、サイズ認識は正確に行われるようになり、トラブルは発生しなくなった。

2.C巻き走行紙安定化ターンバーカバーの作成 (川崎工場)

【改善前】朝刊など片出し印刷時に紙通しをした際にC巻きのターンバー側はスリッターで切られた紙がペラ紙(D巻きの半分のサイズ)になる。ターンバーには空気孔が多数空いており、そこからの空気圧で紙を浮かせることで、摩擦を解消している。ペラ紙では空気孔の半分以上が紙に掛からずエアーが逃げて走行紙が不安定になるため、印刷速度の変動に

より断紙や紙流れなどの要因となっていた。

【改善策】ペラ紙使用でもエアーが漏れないようにターンバーに塩化ビニール製のホースを加工したカバーを取り付けた。ターンバーの空気孔からの空気圧に押されてカバーが外れて走行紙に接触して断紙することがないように、カバーの固定には面ファスナーを使用した。



【効果】カバーは、面ファスナーを使って装着することで、安定性が高まり脱落しなくなった。カバーの効果は大きく、安定稼働と損紙削減に大きく貢献した。

3. 給紙部タッチパネルに給紙部とARLのアラーム履歴画面を追加 (東雲工場)

【改善前】印刷中に給紙部で異常が発生した場合、異常状態のままだと機械停止に直結してしまう。機器の状態を確認して早期復旧を優先し、異常リセット釦を押下するが、全ての異常がクリアされて履歴が残らない。巻取り自動装着や、残芯回収動作不良であれば、目視でトラブル状態がわかるが、センサー不良などのトラブルでは、異常原因を調査することが難しくなっていた。

【改善策】センサーの異常や、機械的不具合

について、異常履歴を残すようにプログラム変更を行った。特に1つのリールに対して巻取りのチャッキングはA～Cの3アームがあり、チャッキング不良が発生してすぐに異常復帰しても、後からどのアームで発生していたか確認できるようになった。



輪転機の給紙パネルに異常履歴を追加

【効果】トラブル時は復旧を優先でき、工程遅れの防止とトラブルの早期復旧に役立っている。

4. 自動インキローラー洗浄装置ARWノズル穴洗浄用ドリルの改善 (川崎工場)

【改善前】自動インキローラー洗浄装置の洗浄液吐出バーの洗浄ノズル(穴)が使用中に詰まって液が出なくなることを防ぐために定期的にノズルを径0.2ミリのドリルで突いて清掃していた。ドリルは単価も高く折れやすい状況にあった。



ノズルは、1胴に付き160個開いている

【改善策】径0.2ミリのドリルに代わって径

0.23ミリのステンレスワイヤーを使用することとした。

【効 果】ドリルは一度折れると先端部が穴を傷つけるため再使用できない。ワイヤーは1回当たりのコストが1円未満で、費用対効果が大きく、使い勝手も向上した。

5.製版補助情報生成ツールの開発

(東雲・川崎工場)

【改善前】製版補助情報とは、刷物の媒体コード、発行日、印刷版、建頁、カラー、起版等の情報が含まれ、製版だけでなく、輪転機の印刷準備にも使用される必要不可欠な情報である。日経媒体は上流システム(NEO+)から製版補助情報が自動的に付加、各工場のCTPサーバーに送信されるが、外部受託媒体には製版補助情報そのものがない。そのため、CTPサーバー運用端末から工場オペレータが手動で製版補助情報の代わりとなる設定を行って運用していた。月に数回の操作となるため慣れず、作業担当者はマニュアルを見ながら、個人差はあるが20分以上かかっていた。

【改善策】簡単かつ安全に製版補助情報を生成するツールを開発した。紙面サイズ、建頁、発行日など基本的な情報を入力するだけで、慣れていない人でも迷わず、ミスなく短時間で作業できるようになった。

【効 果】この製版補助情報生成ツールは、プログラミング言語を学び、開発した。マニュアルを見ずに、1、2分程度で作業でき、当日の急な建頁の変更にも容易に対応できている。製版補助情報の送信先を誤選択しないようにしたり、設定を決定する前にポップアップ画面で確認画面を表示させたりと、オペミスの発生を防いでいる。

6.受変電設備のコンピュータメンテナンス契約の締結

(東雲・川崎工場)

【改善前】東雲、川崎工場にて全館停電を伴う受変電点検は、年2回実施していた。

【改善策】受変電設備の保守契約先を切換え、24時間遠隔監視装置を用いた「コンピュータメンテナンス契約」を結んだ。受変電設備の状態を24時間自動監視し、トラブルの予兆を事前に捉え、設備の保守・予防メンテナンスに反映している。緊急時には電気専門技術者の出動サポートが受けられ、更に万一一点検後1年以内に事故が発生した場合、物的損害補償が附帯している。

【効 果】年間の点検費用が従来から、東雲工場は6割、川崎工場は3割削減でき、経費削減に大きく貢献した。全館停電を伴う受変電点検は、年2回から3年毎1回となり、関係者の休刊日出勤回数の削減を可能とすると同時に、保守体制の強化を図ることができた。

CONPT 日誌

3月16日(火)臨時評議員会(出席7名)
広報委員会(出席6名)
18日(木)オンライン展示会システムプレ
ゼンテーション
4月5日(月)臨時評議員会(出席6名)

8日(木)クラブ委員会(出席8名)
12日(月)技術対話部会(出席名)
企画委員会(出席10名)
20日(火)広報委員会(出席8名)
22日(木)評議員会(出席7名)
5月17日(月)第47回定時総会(於日本プレス
センターホール、来賓3名、会
員社35社41名参加)

わが職場

新雪と新設 ※ 軽快と警戒

東奥日報社 システム局専任局次長兼画像部専任部長 福士 敦

全国の県庁所在地の中で一番降雪量が多いといわれる青森市。昨冬が少なめだったせいもあり、今年は余計に多く感じられました。この恩恵で、新雪のブッシュを楽しむスキーヤーである友人から、八甲田の「パウダースノー」を満喫できたと聞きました。

半面、数日間降り続けることが多かったため、市内の道路は除排雪が間に合わず、道路幅は狭くなり、対向車と行き交うのもままならず、自ずと渋滞が発生し、雪に埋まる車が続出しました。朝の生活道路はまさに新雪状態。ある程度の加速があれば、雪を掻きわけ進めるのですが、一度停止すると、そこから発進するのが一苦労です。ハンドルは切らずに、タイヤの向きを真っすぐにし、前後に微妙なアクセルワークを使わないと車は雪の中に埋まる状態になります。一旦、そうなると前進後進を繰り返して脱出を試みますが、かえって埋もれてゆく始末です。最後の手段はタイヤ、下回り付近の雪をスコップで掻き、ご近所の皆様のご協力で車を押しいただき、脱出するほかありません。

その雪が降りしきる1月8日夜から9日朝にかけて、「新聞製作共有システム」の更新作業を行いました。事前の準備を万全にし、各機器の動作に問題ないことを確認し、9日朝から全紙面の運用を開始しました。弊社は最初の「新聞製作共有システム」導入社です。今回の更新も、最初の社ということになりました。こちらはメーカーの方共々新雪(新設)のブッシュを軽快(警戒)にこなしてゆく所存です。

会員消息

■担当者変更

- * (株)加貫ローラ製作所(4月1日付)
[新]山根 豊氏(営業本部営業4課課長)
[旧]田中 誠氏
- * 第一工業(株)(4月1日付)
[新]富田 和稔氏
(搬送システム本店営業部)
[旧]中島 悠希氏
- * (株)東京機械製作所(4月1日付)
[新]津田 鉄也氏
(新聞輪転事業部
国内営業グループ営業部長)
[旧]新井 利行氏

- * 東洋電機(株)(4月1日付)

[新]竹林 義門氏
(エンジニアリング事業部
営業部副部長)

[旧]渡辺 進氏

- * 富士通(株)(4月1日付)

[新]田中 裕哉氏
(メディアビジネス事業部
第一ビジネス部マネージャー)

[旧]遠藤 徹氏

- * (株)椿本チエイン(4月5日付)

[新]方井 慎治氏
(マテハン事業部営業統括
第二営業部新聞営業課課長)

[旧]後藤 英次郎氏

■新会友

- * 木船 正彦氏(株)東京機械製作所)

■退会

- * (株)KKS (3月31日付)

■所在地変更

- * (株)インテック(5月24日付)
(〒135-0061) 東京都江東区豊洲2-2-1
豊洲バイサイドクロスタワー
電話：050-1702-0510 FAX：03-6685-3894

日本新聞製作技術懇話会 会員名簿 (41社) 2021年6月現在

社 名	〒番号	所 在 地	連 絡 先
(株)イワタ	101-0032	東京都千代田区岩本町3-2-9	03-5820-3161
(株)インテック	135-0061	東京都江東区豊洲2-2-1 豊洲ベイサイドクロスタワー	050-1702-0510
NECプラットフォームズ(株)	270-1198	千葉県我孫子市日の出1131	04-7185-7722
(株)加貫ローラ製作所	544-0005	大阪府大阪市生野区中川5-3-13	06-6751-1121
キャノンプロダクションプリンティングシステムズ(株)	108-0075	東京都港区港南2-13-29 キャノン港南ビル	03-6719-9700
(株)金陽社	136-0082	東京都江東区新木場1-1-1王子木材緑化ビル1F	03-3522-3600
コダック(同)	140-0002	東京都品川区東品川4-10-13KDX東品川ビル	03-6837-7285
コニカミノルタジャパン(株)	105-0023	東京都港区芝浦1-1-1浜松町ビルディング	03-6311-9061
サカタインクス(株)	112-0004	東京都文京区後楽1-4-25 日教販ビル	03-5689-6666
(株)システマック	520-2277	滋賀県大津市関津4-772-17	077-536-3131
清水製作(株)	108-0023	東京都港区芝浦3-17-10	03-3451-1261
ストラパック(株)	221-0864	神奈川県横浜市神奈川区菅田町2800	045-475-7229
西研グラフィックス(株)	842-0031	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉田135	0952-52-8634
第一工業(株)	335-0002	埼玉県蕨市塚越7-2-8	048-441-3660
田中電気(株)	101-0021	東京都千代田区外神田1-16-9	03-3253-2816
椿本興業(株)	108-8222	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル30階	03-6718-0151
(株)椿本チエイン	108-0075	東京都港区港南2-16-2 太陽生命品川ビル17階	03-6703-8402
DICグラフィックス(株)	103-8233	東京都中央区日本橋3-7-20 ディーアイシービル	03-6733-5067
東京インキ(株)	114-0002	東京都北区王子1-12-4 TIC王子ビル	03-5902-7625
(株)東京機械製作所	108-8375	東京都港区三田3-11-36 三田日東ダイビル6F	03-3451-8141
東芝デジタルソリューションズ(株)	212-8585	神奈川県川崎市幸区堀川町72-34 ラゾーナ川崎東芝ビル5階	044-331-1096
東洋インキグラフィックス(株)	173-0003	東京都板橋区加賀1-22-1	03-3963-2534
東洋電機(株)	480-0393	愛知県春日井市神屋町字引沢1-39	0568-88-6401
東和電気工業(株)	104-0032	東京都中央区八丁堀1-7-7 長井ビル6F	03-6222-5005
ニッカ(株)	174-8642	東京都板橋区前野町2-14-2	03-3558-7861
日本電気(株)	108-8001	東京都港区芝5-7-1 NEC本社ビル	03-3798-4666
日本アイ・ビー・エム(株)	103-0015	東京都中央区日本橋箱崎町19-21	03-6667-1111
日本アグファ・ゲバルト(株)	141-0032	東京都品川区大崎1-6-1 大崎ニューシティビル1号館5階	03-6420-2010
日本新聞インキ(株)	210-0858	神奈川県川崎市川崎区大川町13-8	044-589-3500
日本ボールドウィン(株)	108-0023	東京都港区芝浦4-9-25 芝浦スクエアビル11階	03-5418-6121
パナソニックシステムソリューションズジャパン(株)	224-8539	神奈川県横浜市都筑区佐江戸町600番地	045-938-1613
(株)日立産業制御ソリューションズ	110-0006	東京都台東区秋葉原6-1	03-3251-7242
富士通(株)	105-7123	東京都港区東新橋1-5-2 汐留シティセンター	03-6252-2625
富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株)	106-0031	東京都港区西麻布2-26-30富士フイルム西麻布ビル	03-6419-0421
富士薬品工業(株)	176-0012	東京都練馬区豊玉北3-14-10	03-3557-6201
方正(株)	162-0821	東京都新宿区津久戸町1-8 神楽坂AKビル9F	03-4346-6600
マンローランドゴスウエブシステムズジャパン(株)	350-1328	埼玉県狭山市広瀬台3-7-4	04-2954-1093
三菱重工機械システム(株)	729-0393	広島県三原市糸崎南1-1-1	0848-67-2068
三菱製紙(株)	130-0026	東京都墨田区両国2-10-14両国シティコア	03-5600-1595
ミューラー・マルチニジャパン(株)	174-0042	東京都板橋区東坂下2-5-14	03-3558-3131
明和ゴム工業(株)	146-0092	東京都大田区下丸子2-27-20	03-3759-4621